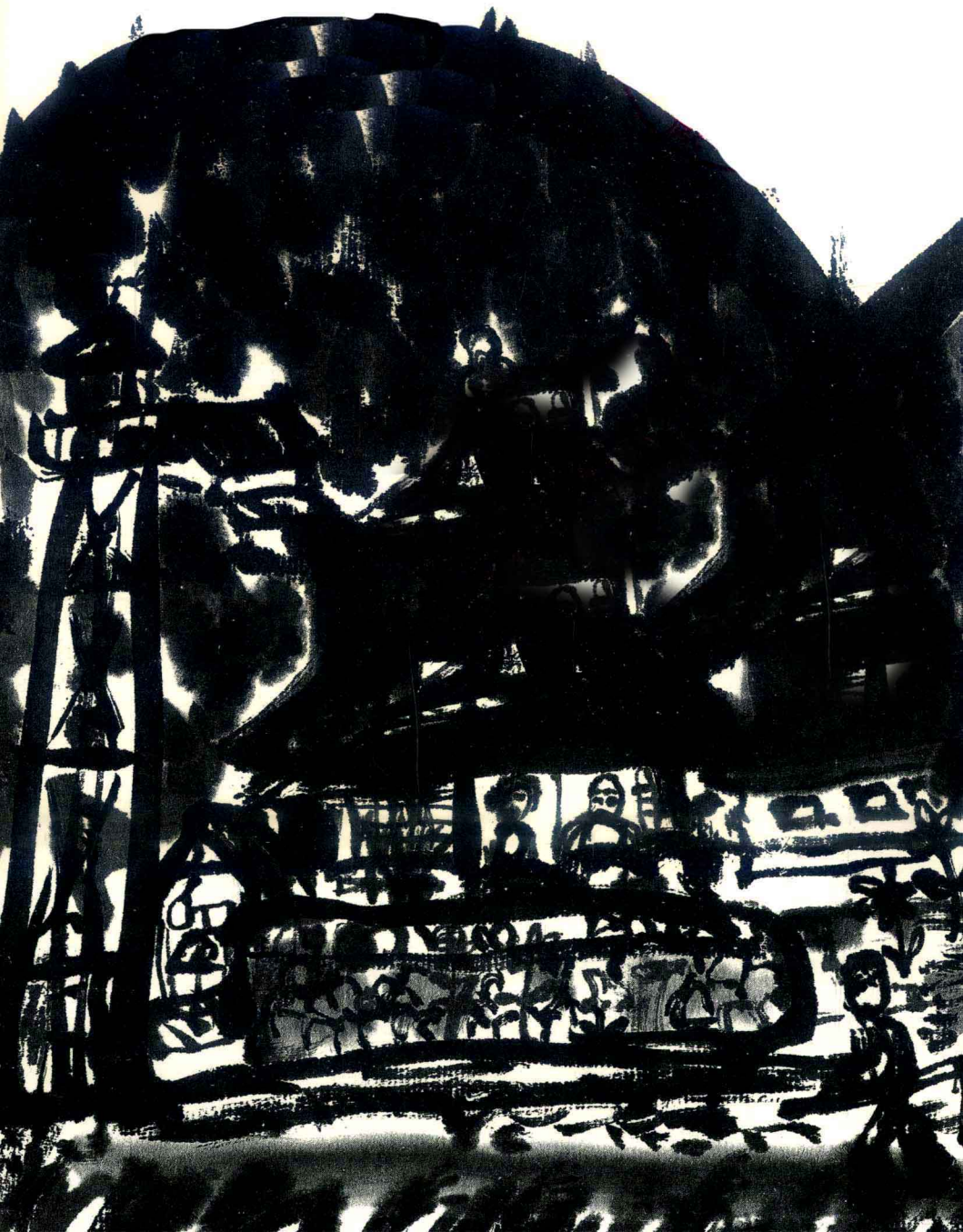


マサヒロ

作・田中文字子
絵・伊藤秀男

MASAHIRO





マサヒロ 1995年12月25日 初版発行

著者——田中文子

画家——伊藤秀男

発行——解放出版社

大阪市浪速区久保吉1-6-12

電話 06-561-5273 振替 00900-7-311854

東京営業所 東京都千代田区神田神保町1-9

電話 03-3291-7586

印刷——日本電植株式会社

NDC913 177P 21cm

ISBN4 7592 5021-2

落丁・乱丁本はお取りかえいたします。

1 おれはヒロシ

I

2 マサヒロが帰ってきた

7

3 おれ様手製のつりざおだ！

24

4 テレビの人間

37

5 オイカワ五匹

48

6 ハンニヤ

54

7 生きかたをさがしよる

59

8 マサヒロが商売をはじめた

68

9 アリジコク — 77

10 マサヒロのお嫁さん — 88

11 立ち退き — 107

12 精神病棟 — 124

13 仕事をしたい — 135

14 ワレハドコカラキタ — 160

始まりの嬉しい一冊
今江祥智 — 172

ブックデザイン
森本良成

1 おれはヒロシ

おれは中田ヒロシ。花山小学校の六年生だ。

左手の人さし指の包帯ほうたいは、家庭科のミシンがけの成果せいだし、右手の傷きずはきのうギリギリをつかまえるのに、うっかりススキで切ったせいだ。三日前にもクヌギの木から落っこちた。おでこのあざは、そのときのもの。

「あんた、カブトムシと心中しんじゆうする気か」

母ちゃんは、おでこといわずひざこぞうといわず、そこらじゅうにべたべたと赤チンをぬりたくった。

それから、鼻の上までずりおちたためがねを人さし指でおしあげて——これが
ごごとをいうときの母ちゃんのくせなのだ——いった。

「二度と山には行ったらあかん」

けれども、父ちゃんはやっぱり男。いうことがちがう。

「ええやないか、けがの一つや二つ。それも男のねうちじゃけん」

父ちゃんは若いころトラックに乗っていた。長距離ちようきよのトラックだ。運送会社
をつぎつぎにわたり歩いているうちに、神戸こうべの会社で母ちゃんと知りあった。

おれが生まれたあとも、転々てんてんとするくらしは続いてしたが、五年前一九六八
年の夏のこと、不規則ふきそくな生活が原因げんいんしてか、入院するはめになった。胃いかいよ
うだ。

一か月後、退院たいいんしてきた日に、父ちゃんはきつぱりといった。

「よし、トラックはやめじゃ」



こうして、一家三人山田の村にやってきた。村の南北両側には、双子山、石楠花山、金剛童子山、稚児ヶ墓山などといった標高六百〇七メートルくらいの山々が連なっている。その山々の谷をあつめて流れるのが山田川。

山田の村は川の流れに沿って細長く開けていた。ここは母ちゃんのふるさとに近い。

父ちゃんと母ちゃんは休耕田を借りて花づくりをはじめたんだ。今では五十アールほどの畑に「希望」という品種のカーネーションを中心に、ダリア、キクなんかの切り花をつくっている。

小さなビニールハウスも手づくりで、はりきってはじめてのはいいけれど、最初は失敗の連続だった。ついおとしも五月に長雨が降り続き、畑に灰色かび病がまん延した。これでさし芽をしたばかりのキクが大被害を受けたうえ、日照時間の不足からカーネーションの色つきも最悪というしまつ。

朱乃



最近さいきんになってやっと

「地に足がついた生活ができるようになった」

と二人は喜よろこんでいる。

ところが、そんな母ちゃんの平和をまたまた乱みだすような事件じけんがおきた。

それは母ちゃんのいとこで、長いあいだ刑務所けいむしょにはいつていたというマサヒ

ロが、突然とつぜんこの村に姿すがたをあらわしたのだ。

うわさはすぐに広まった。

今年はボンボンダリアが上出来じょうゆきで、毎日にこにこしていた母ちゃんは、マサ

ヒロを見かけた日からため息ばかりついている。

2 マサヒロが帰ってきた

梅雨もすっかりあけた七月の午後だ。

学校はきょうから短縮授業になった。

帰りがけに水占橋の上を通りかかると、川魚が銀色の腹を見せて、びんぴら、

びちびち飛びはねている。

おれは家に帰るなり、つりざお片手に飛び出した。

ところが、だ。

川原のヨシのしげみをかき分けて、砂の上に一步足をふみいれたとたん、そ

ここに棒立ち^{ぼうだち}になってしまった。

目の前にマサヒロがつり糸をたれている。悪いことには、人の気配^{けはい}でふりかえったマサヒロと目があってしまった。

おれはよっぽどとんな顔をしていたのだろう。

「いつまでまぬけなつらして立つとるんじゃ。すわらんかい」

マサヒロはそういつて自分のとなりを目で示^{しめ}した。

しかたなしに、おれはその場に腰^{こし}をおろした。

マサヒロは今年でちょうど三十五歳^{さい}。母ちゃんと同年だ。

今の住所はとなり町にある市営住宅^{しえいじゆうたく}に移^{うつ}っているのだけれど、子どものころには、母ちゃんとマサヒロの家はすぐ近所で、小学校も中学校もいっしょだった。

母ちゃんの話では、小さいときからはげしい気性^{きせう}で、ちょっと気に入らないことがあると、母親にでも先生にでもすぐなぐりかかるというのだった。

「きつと、おじさんが悪いんやわ。おじさんときたら競馬^{けいば}、競輪^{けいりん}、パチンコ、マージャン、なんでも首つつこんでね、負けてはよっぱらって帰ってくるの。ほんで、子どもやおばさんにあたるんやから。それに女の人にもだらしのない人やねん。おばさんはただ泣^ないてがまんするだけ。マサヒロはそんなおばさんが、はがゆかったんちがう？」

母ちゃんはおじさんをこきおろした。

中学二年のときにおばさんが死んでしまった。子宮がんだった。

マサヒロはますます暴力^{ぼうりよく}をふるうようになり、不良グループ^{ふりようぐるーぷ}ともつきあうようになつていった。

「マサヒロのグループからお金をまきあげられへんかったのは私^{わたし}くらいよ」

と母ちゃんはいう。

中学の卒業式そつぎようしきの日だ。バイクを買え、買わんといいいあっておじさんと大げんか。ぷいっと家を出て行つて、それつきり帰つてこなかった。

「中学の先輩せんぱいに暴力団ぼうりよくだんの幹部かんぶがいてたから、そこに入りびたつていたみたいよ。それがわかつて、おじさんは連れもどそうとせえへんの。『家におらへんかったらそれでええわ』くらいにしか思つてなかつたんでしょ」

そのころからマサヒロは非行ひこうをくりかえし、マンビキ、スリ、キョウカツとエスカレートしていった。

「こんなことはすぐ聞こえてくるんやね。正光寺しょうこうじのおじゆつさんが保護司ほごししてはったから、案外あんがい、その辺へんから広まったんとちがうかしらん」

母ちゃんは手当りしだいに攻撃こうげきする。

何でも一番最近さいきんは、カクセイザイという薬を自分の腕うでに注射ちゅうしやして、つかまつ

ていたということだった。

それが突然^{とつぜん}帰ってきたのだ。

すると今度はおじさんがなくなった。

「そりゃあ、おじさんは大工やから、道具さえ持って行けば、日本全国どこへ行ってもやっていけるでしょうけど、どこへもにげて行くことなんかでけへん私^{わたし}らは、いったいどういせえていうんやろ」

母ちゃんは近所の手前、はずかしい思いをしなければならないうつぶんをいなくなつたおじさんにまであたり散^ちらした。

マサヒロはこの暑いのに、いつもきつちりとながそでのシャツを着ていた。

そのうえ頭は一枚^{まい}がりの丸ぼうず、首には大きなじゅずをかけて、きまつてゴムの長ぐつをはいている。

こんなかつこうで毎日のように池上^{いけがみちよう}町からやってきてぶつぶつと独^{ひと}り言^{ごと}を

いいながら歩きまわる。

ほお骨^{ほね}のところがったいかつい顔は、決して後ろをふりむかない。ぐっと胸^{むね}をそらして、左手にはいつもタバコ、右手を大きくふりながら肩^{かた}をいからせて歩く姿^{すがた}は、遠くからでもあいつだとすぐにわかった。

がりがりにやせていて、背^せたけも百五十三センチのおれよりはちよつと大きいだけくらいなのに、なんだかひどく大きく見えるんだ。

学校の保護者^{ほごしやかい}会でも、

「近ごろ、見なれない人が学校のまわりをうろうろしているようなので、生徒^{せいと}の登下校にはお母さんがたもじゅうぶん気をつけていただきたい」

と教頭先生から話があったんだって。

「きつとマサヒロのことやわ。先生も、何もあんなまわりくどい、いいかたせんでもいいのにね」